

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・教授
氏 名：木戸 利秋

研究会名：ソーシャルワーク実習教育研究会

研究課題名：効果的なソーシャルワーク実習指導の開発にむけた大学教員と施設実習指導者の課題と役割、および連携のあり方に関する研究

研究会発足当初の背景

ソーシャルワークの専門職をめざして入学してくる学生の多くは、社会福祉学部においては3年次で社会福祉士国家試験受験資格取得のための約4週間の現場実習を行っている。卒業後の進路に福祉分野を選択するかどうかは、様々な要因が考えられるなかで、学生がこの現場実習を効果的に取り組みえたのかどうかという点も少なからず影響しているとみることができる。

そこで、本研究会では、ソーシャルワーク現場実習において、専門職を志向する学生の自己評価を高められるような実習環境の開発を行うために、大学教員と施設の実習指導者にはどのような課題や役割があるのかを明らかにするとともに、福祉の人財育成における大学と施設の連携、また教員と施設実習指導者との連携のあり方について考察することを目的としている。

また、通学課程のソーシャルワーク現場実習は主に愛知県内で行われていることから、この地域の社会福祉施設と大学の連携を強化していくことも、研究会を設置するもうひとつの目的である。そこで2014年度にはじまった「福祉現場と専門職養成をつなぐフォーラム愛知」に参加している施設と大学の協力関係を強化することにも重点をおいた。

研究会の目的

現在のソーシャルワーク現場実習の状況をふまえて、効果的なソーシャルワーク実習指導の開発にとっての研究課題として、①施設実習におけるケアワークを取り入れたソーシャルワーク実習デザインの方法、②ソーシャルワーカーを育てる実習評価の視点と方法、③効果的な実習スーパービジョンのシステムと方法、の3点があると現場実

習担当教員の間では考えられている。そこでソーシャルワーク実習教育研究会(以下、研究会と略)を組織して、これら3点の現状と課題について明らかにするために、施設実習指導者へのアンケート調査と研修会の開催を行うこととした。

研究会の開催日程・テーマ、活動実績

1) 7月6日(水): 第1回研究会

主なテーマ 実習指導者調査の調査仮説および調査項目について

活動実績 2011年度に類似した調査結果をふまえ、2015年度にソーシャルワーク実習を行った愛知県のすべての施設(154施設)を対象とし、実習指導者の感じる「やりがい」「負担感」「ケアワークの必要性」実習スーパービジョンの内容などの項目を検討した。

2) 8月5日(金): フォーラム愛知第1回研修会

主なテーマ 福祉現場と大学の協働による福祉人財養成 - 実習教育を中心に -

活動実績 基調報告をうけて、3つの分科会にわかれて討議し、問題認識を共有した。また実習指導者調査の結果概要を参加者に報告した。

3) 9月14日(水): 第2回研究会

主なテーマ 研修会のふりかえり その1 分科会を中心に

活動実績 テープおこしによる議事録をふまえ、分科会の成果と課題について検討した。

4) 11月16日(水): 第3回研究会

主なテーマ 研修会のふりかえり その2 基調報告を中心に

活動実績 二木学長の基調報告内容を全国社会福

祉教育セミナーのシンポジウム内容と関わらせながら検討した。

5) 12月21日(水): 第4回研究会

主なテーマ 調査結果および研修会の報告書発行に関わる原稿の最終確認

活動実績 調査協力していただいた施設、研修会に参加した施設、フォーラム愛知の参加法人に対して送付する報告書原稿を点検した。

6) 3月7日(火): 第5回研究会

主なテーマ 2016年度の研究活動のまとめと今後の計画について

活動実績 今年度の実績をふまえ、次年度の研究計画案を検討した。

研究成果

効果的なソーシャルワーク実習指導の開発によって3点の研究課題を示した。第一の、ソーシャルワークとケアワークの関係については、実習指導者調査や分科会での議論を通して、児童分野において、ケアワークを通して子どもの理解を深めるという理由から、ケアワークの必要性を肯定する実習指導者割合が高いという結果が明らかになった。他方、高齢者施設の報告からは、現場実習からケアワークを外した実習プログラムを展開している例も示され、分科会の結論としては、「どちらも大事」ということになったが、ソーシャルワーク実習の目標を達成する上で、意識的にケアワークをどう位置付けるのか、分野や施設種別を考慮して、さらに事例を重ねていくことが課題となる。

第二に、今年度新しく改訂した実習評価表にもとづき、実習施設において評価をどのように捉え、施設実習のなかに組み込んでいるのかを検討した。例えば、福祉専門職として学生が成長するきっかけを与えるために、利用者を理解できるような質問とは何かを考えさせ、傾聴と受容という言葉の一面的な理解に陥りがちな学生に気づきを与え、最後に利用者との面談に臨ませているという事例、

実習評価されているのは学生だけでなく、実習指導者や職員の教育力も評価されているという事例などを掘り起しながら、社会福祉法人や施設のもつ強みを生かした実習プログラムの開発と検証を今後の課題とした。

第三に、効果的な実習スーパービジョンのシステムと方法をめぐって、「施設と実習生が共に学んでいく」という貴重な体験をした学生からの報告が入ったことによって、分科会の議論が活性化したことは、現場の施設指導者と大学の共同研究が何にもとづいて行われるべきなのかが示唆された。実習教育での学生の学びを中心に据えることによって、施設と大学双方の実習指導上の課題を共有できたことが成果として確認された。分科会自体が実習スーパービジョンにおける学生、施設、大学の三者間のあり方をふり返る場になっていたことをふまえ、学生参加の手法を今後も追求していく課題が明らかとなった。

1) ソーシャルワーク実習教育研究会『2015年度ソーシャルワーク実習調査報告書(実習指導者調査)』2017年2月

2) 社会福祉実習教育研究センター『2016年度第1回研修会(抄録)』2017年2月(研究会が抄録集の編集を担当)

3) 高梨未紀「ソーシャルワークを教えるために実習指導者が工夫していること—実習指導者を対象にしたアンケート調査から—」『2016年度日本福祉大学実習教育研究センター年報』第14号、2017年7月発行予定(掲載予定)

4) ソーシャルワーク実習指導ⅠⅡの合同担当者会議(2017年3月15日)において、実習指導者調査の結果概要を報告し、実習担当教員に成果のフィードバックを行った。

今後の展望

2016年度の研修会開催を中心とした前後の研究会活動が、効果的なソーシャルワーク実習指導システムの開発に向けて有効な手段であることが

確認できた。2017年度以降もこの研修会の枠組み（基調講演+3つの柱にもとづいた分科会）を基本的に維持しつつ、各分科会には学生参加が基本となるように徹底しながら、数多くの教員と施設指導者が参加し、実習教育やソーシャルワークの人財養成の課題について深めることができるような研修会づくりを行う。そのためには、研究会組織を教員だけでなく、協力者として現場指導者も参加できるように工夫したい。このような仕組みで2-3年、共同研究を継続しながら、効果的なソーシャルワーク実習指導システムの開発を行い、そこから人財養成につなげていくための方法論まで視野に入れて取り組むことを課題としたい。